

Encyclopaedia Britannicaにおけるnursingの記述について ——過去100年間に出版されたBritannica諸版のnursing記述の比較——

江藤裕之*¹, 岸利江子*²

【要旨】 ひとつの概念としての“nursing”はどのようにとらえられ、変遷してきたのか。また、その変遷の背景にあるものは何か。本稿の試みは、NightingaleがNotes on Nursingを出版し看護の意味と意義を広めた1859年以降に出版されたEncyclopaedia Britannicaの各版（10版、11版、14版、15版）におけるnursingの記述を比較検討することで、この100年間の看護観の変遷をたどることである。版が新しくなるにつれて、看護がより専門化してきたこと、また看護が国際的な場で実践され、国際的な機関により支援されてきたことが分かるが、その背景には看護の専門化・国際化のみならず、科学全般の専門化・国際化、そしてEncyclopaedia Britannicaの国際化（単なる英語国民の百科事典から世界の知の集成へ）が読み取れる。

【キーワード】 概念史、看護、看護史、看護学史、ブリタニカ百科事典

「概念史 (history of ideas)」という学問分野がある。主として文献学的手法を用い、ひとつの概念を通時的に追ってゆくことで、その概念がたどった歴史の変遷や今日的用法の源泉を明らかにしようとするものである。さらに、それぞれの時代思潮の中で、ある概念がどのようにとらえられていたのかを見ることや、そのとらえられかたについて各時代の比較を行なうことにより、時代時代の知的雰囲気を理解する視点を得ることもできる。人間の精神の「変遷」（あえて「進歩」という語を用いない）とその知的背景を探求するうえで概念史は有効な手段といえよう。

では、概念史にはどのような方法があるのだろうか。例えば、A Syntopicon of Great Books of the Western Worldが挙げられる。これは、Robert M. Hutchins (1899-1977) と Mortimer J. Adler (1902-2001) により編纂されたGreat Books of the Western World (1982) の第2・3巻に収録されているが、“angel”から“world”までの西洋精神を形成した102の重要概念——AdlerはGreat Ideasと呼んでいる——について、それぞれの歴史的な変遷を概観

し、その概念について誰がどのようなことを書き残し、それが西洋の古典的名著 (Great Books) のどの箇所でどのような使われ方をしているかについて詳細かつ簡便にまとめたレファレンスである。^{注1}つまり、Syntopiconという編纂物は「主題 (topics)」を「集めた (syn)」ものである。

概念の歴史をひとつの読み物としてコンパクトにまとめたものとしては、このSyntopiconの他に類書が何点か存在するものの、^{注2}単行本で取り扱うことのできる概念の数には限りがあり、解説の分量も限られてくる。また、Oxford English Dictionary (以下、OED) のような言葉の意味の歴史的配列による辞書も概念史研究には重要な資料となるが、あくまでも言葉の意味の史の変遷に限定されるので、ある概念の詳細な歴史的背景までは知ることが難しく、クロス・リファレンスとしての活用度も高くない。そこで、ある概念の歴史を調べる有効な手段のひとつとして——時間的スパンは比較的短くなるが——異なる版の百科事典の記述内容の通時的比較という方法が考えられる。つまり、ひとつの項目に関して、時代を通して改訂された同じ

*¹ 長野県看護大学 *² イリノイ大学シカゴ校
2004年10月5日受付

書名の百科事典の異なる版の内容を比較するという方法である。

百科事典はそれが書かれた時代の学問・科学の精華を集大成したものである。今日的視点に立てば、古い百科事典の記述には不適切なものや、最新の学説に矛盾したり、完全に否定される内容のものが少なからずあるだろう。しかし、ここで着目したいことは、「何が正しいのか」ではなく、「何が正しいと人々が認識していたのか」という点、つまり、ある概念がある時代において、どのように認識され、どのように考察・研究されてきたのかという点である。

本稿では、概念史のモデルとして nursing を取り上げ、^{注3} 英語圏で継続して出版されている百科辞典としてはもっとも歴史のある Encyclopaedia Britannica (以下、Britannica とする) の各版における nursing の記述内容の概要と特色を記し、比較する。このような手法で看護観の史の変遷をたどり、科学としての近代看護学に対する人々の認識がいかに変容してきたのか——あるいは、変容しなかったか——を見ていく。

本稿で取り上げる Britannica の諸版について

Britannica は 1768 年から 71 年にかけて、「北のアテネ」と呼ばれた文化都市エディンバラで 3 巻の初版本が企画・出版された。初版出版からわずかに約 100 年の間に 10 回の版を数え、改訂と改版を重ねるごとに質量ともに充実度を増していく。本稿は、10 版、11 版、14 版、15 版を取り上げ、それぞれの版の nursing に関する記述内容を比較検討するものであるが、その前に Britannica の諸版について簡単に述べ、^{注4} 上記の版を取り上げる理由を記しておく。

近代看護学の出発点を Florence Nightingale (1820-1910) に置くことに異論はないだろう。そして、Nightingale による啓蒙的書物 Notes on Nursing が、その業績、思想、研究、主張を広く世に知らしめ、また、看護そのものへの関心を高める契機となったことは多くの識者の認めるところである。したがって、近代看護学の変容と、その認知に関する変遷の歴史を Britannica 諸版における nursing の項目から検討するには Notes on Nursing が公刊された 1859 年以降に出

版された Britannica の諸版を比較することが方法として最適であると考え。そこで、1875 年から 89 年にかけて出版された 9 版が最初の検討の対象となる。

Britannica 9 版 (25 巻) は、「進化論」を Thomas H. Huxley (1825-1895) が手がけるというように、学問・科学の粋を結集するかたちで当時を代表する学者により執筆された。しかし、この版には nursing の項目は存在しない。^{注5} 9 版に 10 巻の補遺を加えたものが 10 版 (1902-3) であるが、この補遺の 7 巻目 (合冊全体としては 31 巻目) に項目として nursing が登場する。したがって、Nightingale の Notes on Nursing の出版以降、nursing が初めて独立した項目として Britannica に登場するのは 10 版 (9 版の補遺) である。11 版 (1910-11) 以降は、全ての版に nursing は項目として存在する。

11 版はイギリスで出た最後の版であるとともに、第一次世界大戦以前の学芸 (特に人文学関係) について書かれたものとしては最善の版と言われている (渡部, 1989a)。この 11 版に補遺 3 巻がついたのが 12 版 (1921-22)、さらに新補遺 3 巻を 11 版に加えられたのが 13 版 (1926) である。このように、11 版から 13 版にいたるまで本体の内容は基本的に変わらないため、本稿では 11 版を用いる。

11, 12, 13 の各版の人気は高かったが、第一次世界大戦という未曾有の大戦争により軍事・軍需を中心に格段に進歩した科学・技術の内容をカバーする必要が生じた。そのため Britannica も新版が企画された。これが、14 版 (1929) である。この版は、不断に修正が行われ、なかでもシカゴ大学が編集の中心になった 1960 年代の諸版は定評がある。そこで、本稿では、1967 年度の版を用いることにする。^{注6}

最後に、最新版の 15 版 (1975) であるが、これは先に Great Books について述べた箇所挙げたシカゴ大学の Hutchins が編集主幹となり、1 巻の Propedia (全体のガイド)、10 巻の Micropedia (簡易百科)、そして 19 巻の Macropedia (大項目百科) からなる新機軸の編集方針を取り入れ話題となった。さらに、1985 年には、これも先の Great Books の箇所で言及した Adler により増補改訂がなされ、今日新刊として手に取ることができる Britannica はこの Adler 版である。本稿で

は、この版に関してはAdler版の中でも最新刷のものを用いる。

Britannica各版の nursing に関する記述の概要と特徴

それでは、nursingの項目について、上にあげたBritannicaの各版の記述内容を概観し、その特徴を列挙してみよう。

1. 10版(1902年)・11版(1910-11年)

10版(9版の補遺)におけるnursingの項目は2段組4ページあり、これは分量的に見て他の項目に比べても遜色のないものといえる。構成は、「看護の歴史」、「看護訓練と組織」、「看護業務と資格付与」からなる。

記述内容の特徴として、まず目に付くのは冒頭にある看護の定義である。ここでは“The development of sick-nursing, which has brought into existence a large, highly-skilled, and organized profession, is one of the most notable features of modern social life. [看護の発達は、広範な、高い技術を要する系統化された専門職業を生んだことで、現代の社会生活のなかでもっとも注目値することのひとつである(訳は引用者)]” (nursing, 1911, vol. 31, 295) とあるが、「看護」をnursingではなくsick-nursingと表現しているところに時代が感じられる。

よく知られるように、nurseという語は「乳母」(初出14世紀)、あるいは「授乳する、養育する」(初出16世紀)という意味で使われていた。「病人を看護する」という意味でのnurseは16世紀後半に初出例が見えるものの、広く使用されるようになるのは18世紀からである(cf. OED)。10版が企画・執筆された19世紀後半では、nurseという語に「子どもの養育」というイメージが強く残っていたのであろう。そこで、わざわざsick-nursingという表現を用いることで、保育、養育の意味のnursingから傷病者へのnursingを区別しようとしたのではないか。その後、看護は健康人や集団へとその対象が広がってきたが、この10版の段階では「傷病者の看護」が新しい看護の視点として扱われていることが、近代戦争などの影響といったその時代背景を知る上でも興味深い。

看護の歴史に関する記述では、年代順に宗教、戦争、科学を大きな契機とする視点から看護の発達史が説明されている。古代から中世にかけては宗教的な慈愛の精神から看護の組織的活動が始まり、それが近代戦(クリミア戦争やアメリカ南北戦争)における傷病兵への看護実践の要請から看護における専門訓練の必要性が認識され、その後の科学の飛躍的進歩に伴いより分化された専門職としての看護の地位が確立されるにいたったという内容である。また、近代看護の発祥としてドイツのKaiserswerth Instituteが言及されており、Nightingaleがそれほど重視されていない点は注目値する。

看護訓練と組織に関する記述では、イギリスの事例が中心である。当時のイギリスでは、総合病院、専門病院にかかわらずほぼすべての病院が看護師に対する職業訓練制度を有し、特に大きな病院では看護学校の機能を兼ねた看護師教育システムが存在していたことや、その病院付属の看護学校へ入学するための要件(例えば、基礎解剖学、生理学などの試験に合格すること)が述べられている。また、看護師は何らかの看護組織か団体に所属することも記されており、それまで修道院を中心にした看護活動が、だんだんと病院などの組織に移り変わってくる様子が読み取れる。さらに、看護師の給与体系が当時の金額で具体的に詳述されている点も興味深い。このようなイギリスの事例の他にも、アメリカやフランスの事情についても触れられ、さらに、カナダ、オーストラリア、南アフリカなどイギリスのかつての植民地ではイギリスをモデルにした看護が発達したという記述もある。

看護業務と資格付与に関しては、看護師に要求される資質として、身体的強靱、健康、清潔、良質な気質、自己コントロール、知性、義務感が挙げられているが、知的な判断を要求する職業というよりはむしろ肉体労働・感情労働としての看護の側面が強調されている。特に、看護における肉体労働の側面や、また男性患者への看護において男性看護師(male nurse)の効用が強調されている点が興味深い。

以上、概観した10版のnursing記述における特徴的な点としては、

1) Nightingaleはそれほど強調されず、Sir Henry

Burdett (1847-1920) の著作 (例えば *Hospitals and Asylums of the World*, London, 1892) が参照されていること。^{注6}

- 2) 近代的な看護システムの発祥としてドイツの Kaiserswerth Instituteが言及され, Nightingale に多大な影響を与えたことが明記されていること。
- 3) 主として, イギリスの事例報告に限定されていること。
- 4) 男性看護師についての言及があること。が挙げられよう。

すでに述べたように, 11版は10版の改訂版として今日でもなお評価の高い版であるが, 少なくとも nursing の記述は10版の内容とほぼ同一である。つまり, 改訂されず分量が短縮されただけである (11版では2.5ページとなり, 10版から1.5ページ分程が削除)。削除事項は国別の看護教育システムと男性看護師に関する部分である。この削除の主な理由としては, 新版の百科事典を出版するにあたり見出し語の項目が増えたこと——単純にスペースの問題——が挙げられよう。また, 男性看護師についての記述が無くなった理由としては, 11版が出版された頃にはすでに看護師が女性の職業としての地位を確立していたことが考えられる。

2. 14版 (1967年)

14版の記述は分量・内容ともに10版よりもさらに充実している。分量は, 2段組6ページに増え, また構成がより体系化されている。「看護の全般的歴史」, 「イギリスにおける看護の概観」, 「諸外国の看護事情」, 「国際的な看護活動の概観」, そして「アメリカの看護」についての記述がある。さらに, この版から nursing の項が正看護師 (RN) の資格を持つ著者により執筆されたことが銘記されている (10版では各項目の著者が明らかにされていない)。

看護の定義は10版ほど明確ではないが, “the art of nursing in the form of nurturing the young, protecting the helpless and tending the sick and injured [子どもを養育し, 無力な人を保護し, そして傷病者の面倒を見るという形での看護 (訳は引用者)]” (Seymer et al., 1967, vol. 16, 790) といった記述から, 病人を見る sick-nursingから, 広範囲な看護の対

象へと推移してきたことが読み取れる。

では, 記述の特徴であるが, 以前の版と比べて顕著な点はNightingaleの業績を極めて大きく取り上げていることである。特に, 看護の全般的歴史においては, 看護史を, 1) 1860年までの「Nightingale以前の時代」, 2) 1860-1900年間の「Nightingaleの時代」, 3) 1900年から1919年にかけての「看護の拡大と専門的組織の時代」, そして4) 1919年以降の「看護教育の方法的改善, 政府による認知, 国際関係の成長の時代」に分けている, つまり, ここでは看護の歴史を語るに当たってNightingaleが基準となっている。

イギリスにおける看護の概観では, 近代看護の発生, 専門職の発達, 看護の統括組織, 看護教育, 看護サービスなどが述べられている。ここでは, Nightingaleを看護史の中心に据えるという歴史観から, Nightingale以前の看護の歴史についての記述は簡略化され, 前の版で大きく取り上げられていたBurdettについては言及されず (ただし, 参考文献欄には残っている), また, ドイツのKaiserwert Instituteは軽く触れられるにとどまっている。後者の理由としては, 第一次大戦後のアングロサクソン国家における「ドイツ嫌い (Germanophobia)」の影響が十分考えられる。また, Nightingaleの活躍以降についてはイギリスにおける看護の概観の章でも詳述されており, 全体としてNightingaleの偉業を称える筆運びとなっている。

前の版に比べ, 諸外国の看護事情の記述は, カナダ, オーストラリア, ニュージーランド, 南アフリカ, スカンジナビア諸国, フランス, イタリア, ベルギー, ドイツなどが扱われ, その範囲も広がっている。ただし, 看護事情についての詳しい記述は依然として西欧諸国に限られている。

イギリスとアメリカの看護事情に関する記述がそれぞれ2.3ページと, この版のnursing記述の大部分を占めているのはBritannicaが英語の百科事典であることに加え, 両国がその時点で看護の主要な先進国であったことも大きな理由として考えられる。特に, 14版になってBritannicaの編集の中心がアメリカ (シカゴ) に移ってからは, 「アメリカの看護」についての記述——その歴史, 現状, 政府の看護政策などの記述——がより充実した。

また、前の版では見ることのなかった国際的な看護活動の概観についての記述からは、新しい分野においての、看護職、看護実践に期待する時代の動きを垣間見ることができる。看護、保健、衛生が国際的な視野から語られることは、いわゆる看護の国際化が広く認知され始めたことを示すものといえよう。看護の国際組織についての記述はWHO（1948年設立）とICN（1899年設立）の設立に関するものが主となっている。

ここで、この版のnursing記述の特徴は次のようにまとめることができる。

- 1) 看護史におけるNightingaleの位置が決定的なものとして扱われている。
- 2) Nightingale以前の看護の先駆的存在、特に最初の組織的な看護教育・実践機関としてのドイツの役割（Kaiserswerth Instituteなど）についての記述などがトーンダウンしている。
- 3) イギリス、アメリカの看護事情の記述が大部分を占めるものの、それ以外の国に関する情報（西洋諸国が主だが）や看護の国際的活動の記述なども見られる。
- 4) 正看護師（RN）の資格を持つ著者によって執筆されている。

3. 15版（2002年）

上述したように、15版は1巻のPropedia（全体のガイド）、10巻のMicropedia（簡易百科）、そして19巻のMacropedia（大項目百科）からなる。まず、Micropediaでのnursingの項目であるが、分量は1ページ3段組のうちの1段であり、内容は「看護の歴史」、「20世紀後半の看護教育プログラム」、「免許・登録制度」などについて記されている。これは、Macropediaの記述の要約とみてよい。

Macropediaにおいては、nursingという単独の項目はなく、Medicineという大項目の中のRelated Fields（関連領域）にnursingについての項目が設定されている。これは、Macropediaの大項目主義による編集方針であり、必ずしも看護が医学に従属すると示唆しているものではない。分量は2段組で3ページであり、14版に比べると分量的には少なくなっているが、内容はより包括的で、また、国際的な視点から見た看護実

践が強調されている。この版のnursingの記述も正看護師（RN）の資格を持つ著者によるものである。

導入部分からICNによる「看護が果たす役割」についてのステートメント（健康促進、疾病予防、健康回復、苦痛緩和）、そしてWHOが提唱するプライマリヘルスケアでの看護師、助産師に期待される役割について簡潔に述べられており、それがこの版の看護の定義となっている。このような記述は、より国際的な看護という印象も与えている。

続く「看護の歴史」では、前の版と同じくNightingaleの記述に割くスペースからその業績が大きく評価されていることがうかがえる。しかし、14版に見られたような「Nightingale以前・以降」という区分けはなくなっており、Nightingaleを絶対視するような姿勢は薄れている。全体の流れとして、イギリスやアメリカといった個別な国における看護の歴史ではなく、国際赤十字やWHOなどのような国際組織との関連の中で看護の歴史をまとめることにウェイトがかけられている。

次に「看護実践」が、看護の種類、教育、免許と登録、組織という観点から描かれている。制度的な観点からの分類（正看護師、准看護師、看護助手）、学歴からの分類（専門学校卒看護師、大学卒看護師、大学院卒看護師）、看護実践・教育分野からの分類（施設、地域、教育、実習、研究、報道）、責任の種類による分類（スタッフナース、教育者、主任、管理者、相談役）、雇用の場による分類（病院、開業医、保健所、学校、産業、大学）といった看護教育実践の場や看護職者の分類は、今日、看護が専門化・多様化したことを示すものである。また、公衆衛生、教育、産業、軍隊、政治との関係において看護の役割が述べられ、特に、公衆衛生の部分ではプライマリヘルスケアについて再度強調されている。

看護の専門化に関しては、アメリカにおける看護の現状から、ナースプラクティショナーやCNSなどの看護専門職がますます発達してきたことが述べられている。そして、看護の大学教育化についても、アメリカを始めとして看護教育が大学化しつつある国が挙げられている（オーストラリア、カナダ、コロンビア、ペルー、エジプト、インド、フィリピン、台湾、タ

イ, イギリス, ただし, 日本は含まれていない)。看護の専門教育については, 免許取得を目的とした教育だけではなく, 卒後教育, 大学院教育など専門を深めるための学習継続について書かれているが, これは看護実践のさらなる専門化によるものである。

最後に, 「国際・多国籍間の看護実践組織の役割」であるが, 国際赤十字, 世界保健機構については14版の内容をさらに発展させ, そして新たに加えられた欧州経済共同体についても, その組織の概要と活動内容が記されている。

ここで, 15版の nursing 記述の特徴をまとめてみよう。

- 1) 看護の歴史における Nightingale の意義を認めてはいるものの, 14版に見るような Nightingale を絶対視する姿勢は薄れている。
- 2) 10版 (11版) がイギリス中心, 14版がイギリス・アメリカ中心の記述だったが, 15版では看護の制度面ではアメリカの事情が中心に記述されている。また, 世界的視野での看護やより一般的・普遍的な観点からも看護が述べられている。
- 3) 14版と同しく, 正看護師 (RN) の資格を持つ著者によって執筆されている。

Britannica 各版の nursing 記述の比較

以上, 10版 (11版), 14版, 15版の Britannica 各版における nursing の記述内容を概観した。分量的には, 11版, 15版で減っているが, 新版の百科事典を出版するにあたり見出し語の項目が増えたこと, つまり, 多くの分野で発達が見られ, 知識の総量が多くなり, それらにもページを割く必要が出たためと考えられる。また, 構成に変化については, 全般的な「看護の歴史」に続いて, 国別の「看護実践の概要」が書かれるのが共通のパターンであるが, イギリスやアメリカといったアングロサクソンの国を中心としたものから, 版が新しくなるにつれて諸外国の事例や, 国際看護組織へ割くスペースが多くなっている。

さらに, それぞれの版の内容を比較し, 変化の背景を考えてみたい。

1. 看護の専門化

10版が出版された当時, 看護はそれほど専門化されておらず, 看護の業務には料理, 家事, 子守りなども含まれていたが, すでにその時点で将来的により専門化された看護教育の必要性が示唆されている。14版になると小児看護, 精神看護など専門看護師の先駆となる看護の専門化がみられ, 加えて15版では外科看護, 産科看護, リハビリ看護, 公衆衛生等が挙げられているだけでなく, 家族計画, 薬物依存, ターミナルケアなど看護師に求められる責任や, 患者擁護など倫理も拡大してきたことが書かれている。また, 10版の記述では, 看護教育は通常2~3年のトレーニングを必要とし, 法による規制はなく, 社会的・教育的に低い女性が従事することの多い重労働として記述されていたが, その後の看護の専門化にともない, 15版にいたって看護は国際組織をもつ専門職として確立してきたことが読み取れる。

こういった変遷を見るだけでも, 看護が扱う分野がいかに関心化し, 慈愛の精神だけでは対応できず (時代が新しくなるにつれ, 看護実践における宗教色が薄れてきたことは確かである), 専門的なトレーニングなしには成立しえなくなってきたかが分かる。また, 看護が専門化する経過や発達を記述する上で, 教育, 立法化, 給与体系, 専門組織の発達は主要な指標となっているように思える。

2. イギリス, アメリカの看護事情記述から, 国際的な看護実践記述へ

国によって看護の発展の経過は大きく異なるので, 西洋の国ごとに経緯がまとめられているが, 記述の重点がイギリスを中心としたヨーロッパの看護からアメリカの看護へとシフトしていることが明らかである。東洋に関しては主要な記述はそれほどなく, 15版で国名を挙げる際にアジアの国がやや顔を出す程度で, 日本に関する記述はない。

また, 14版以降に見る看護の国際組織の記述の分量と内容から, その期間に看護関連の国際組織が発達し, その中で看護が担う役割や責任が国際的な範囲へと拡大し, またそれらの国際機関による看護実践への援助が質量共に充実してきたことが分かる。特に15版にお

いては、国際的視野に立つ看護実践、そして学際的な看護研究活動（特に、プライマリヘルスケアなど）が強調されていることに注目すべきである。

おわりに

ここ100年くらいにわたる Britannicaの nursingの記述を概観し、その内容を比較してみた。ここで特に気づく変化は、看護の記述内容がイギリスやアメリカといった個別の国の事情から、ICNやWHOといった国際機関、すなわち国際的な看護実践へとそのウエイトが推移していることである。それは、ICNやWHOなどの国際機関による看護支援活動の成果も十分考えられるが、むしろ、看護がより科学としての普遍性をアピールし始めたという事実と、Britannica自身も単なる英語国民の百科事典から脱皮して世界を代表する国際的な百科事典としての地位をより確固なものとしたことによるものであろう。

また、Nightingaleの扱いや、それに関連するドイツの看護についての言及も興味深い点である。Nightingaleについては、10版ではそれほど強調されなかったものの、14版ではあたかも看護史の唯一の道標であるかのような扱いを受けている。しかし、15版ではその強調も薄れている。10版では、近代看護のシステムにおけるドイツの Keiserswerth Instituteが果たした意義や、そのInstituteがNightingaleへ与えた影響などの説明もあったが、先に指摘したように、第一次大戦によるアングロサクソン国民の「ドイツ嫌い (Germanophobia)」が高じた結果から、14版ではドイツ (Keiserswerth Institute) の看護への貢献はほとんど触れられず、Nightingaleのみが近代看護を作ったかのような絶賛的記述となっている。そして、その反省からか15版ではニュートラルな記述となっている。

Britannicaの初版が出版されたのは1768年から1771年であり、最新版 (15版) に至るまで200年以上もの歴史がある。この2世紀にわたる連続性には何ものにも替えがたい情報がある。IT時代を迎えた今日、資料検索の方法やリファレンスの利用法に大きな変化をもたらされた。共時的な観点からすれば、情報の幅広さ、

量、そして、とりわけスピードにおいてインターネット検索は印刷物の百科事典をはるかに凌駕している。しかし、通時的に見ると、2世紀の長きにわたって不断に改訂、改版が続けられてきた百科事典からは上記のような発見もある。ここから現代を見る何かのヒントを得ることが、歴史に学ぶことであろう。

注

1. 後に、Great Ideasの史的変遷を記述した Introductionの部分のみ The Great Ideas. として1巻にまとめられた (Adler, 1999).
2. 例えば、Adler & Doren (1977), 渡部 (1992).
3. Adlerの Syntopiconに nursingは Great Ideasの項目としては取り上げられていない。
4. この点は、渡部 (1989a, 1989b), 及びKogan (1958)に負うところが大きい。
5. 初版にも nursingの項目はない。
6. 図書館では通常、百科辞典の新しい版が出るたびに主としてスペースの問題から旧版は破棄される。したがって、アメリカ議会図書館や大英図書館などのすべての出版物を保存する目的で設立された図書館を除けば、現在、普通の図書館 (大学図書館も含め) で利用できる Britannicaは最新版 (15版)のみである。ただし、11, 12, 13のいずれかの版に限っては、本稿にも記載したようにその記述内容の卓越性から、今日でもなおレファレンス・コーナーに新しい百科辞典に混ざって閲覧可能な状態で置かれている大学図書館もある (著者が直接確認したのは、ジョージタウン大学, コーネル大学, カリフォルニア大学, イリノイ大学)。また、最近11版は電子化され、インターネット (Online Classic Encyclopedia - LoveToKnow) でその全内容が検索できるようになった (<http://www.1911encyclopedia.org/>)。本稿で使用した Britannicaはすべて著者所有のものであるが、このような状況のもとで、14版に関しては本稿で用いた1967年版以外のものを参照することは困難であった。1970年代以降、看護は大きく変革したと言われるが、本稿では70年代に修正が行われた14版についてはチェックできなかったのが今後の課題としたい。

7. Sir Henry Burdettは雑誌The Hospitalの創刊者であり編集者。病院の組織作りや活動に関わり、当時のnurseの労働条件改善に貢献した。詳しくはDictionary of National Biography, または<http://www.bodley.ox.ac.uk/dept/scwmss/wmss/online/1500-1900/burdett/burdett.html>を参照。

謝 辞

事典・辞典や書物の異なる版を通覧し、その記述を通時的に比較することで、人間の認識の歴史をひもとき、そこにひとつの文化史的価値を見出すことは、渡部昇一教授（上智大学名誉教授）のご示唆によるものである。注にも記したが、本稿の基本アイディアは同教授に負うところ大である。ここに、その旨を記し、謝意を表したい。

参考文献

Adler MJ (1999): *The Great Ideas. A lexicon of Western thought by Mortimer J. Adler.* Scribner Classics, New York.

Adler MJ, Doren Cvan (1977): *Great Treasury of Western Thought. A compendium of important statements on man and his institutions by the great thinkers in Western history.* R. R. Bowker, New York.

Hutchins RM, Adler MJ (1982): *Great Books of the Western World.* 54 vols. Encyclopaedia Britannica Inc., Chicago. [1st ed. 1952].

Kogan H (1958): *The Great EB. The Story of the Encyclopaedia Britannica.* The University of Chicago Press, Chicago.

Leone LP (2002): Nursing. In *The New Encyclopaedia Britannica*, 15th ed. Vol. 23, pp.814-817, Encyclopaedia Britannica, Inc, Chicago.

nursing (1902): In *The New Volumes of the Encyclopaedia Britannica*, 10th ed. Vol. 31,

pp.295-298, Adam & Charles Black, Edinburgh.

nursing (1911): In *The Encyclopaedia Britannica*, 11th ed. Vol. 14, pp.914-917, Encyclopaedia Britannica, Inc, New York.

Seymer LR, Wenger ML, Houghton M (1967): Nursing. In *The Encyclopaedia Britannica*, 14th ed. Vol. 16, pp.791-797, Encyclopaedia Britannica, Inc, Chicago.

渡部昇一 (1989a): 人生の節約——古い百科事典・索引の効用をめぐって。名著サプリメント, 名著普及会, 東京。1989年6月(臨時増刊): 2-27.

渡部昇一 (1989b): Britannicaの諸版について。名著サプリメント, 名著普及会, 東京。1989年6月(臨時増刊): 53-59.

渡部昇一編集 (1992): *ことばコンセプト事典*, 第一法規, 東京。

【Summary】

“Nursing” in the Encyclopaedia Britannica: Comparison of the description of “nursing” from different editions of Britannica.

Hiroyuki ETO*¹, Rieko KISHI*²

*¹ Nagano College of Nursing

*² University of Illinois at Chicago

How has “nursing” been conceived? How has the concept of “nursing” changed? And why? The present research deals with a conceptual history of “nursing” for the past one hundred years by means of reviewing and comparing different articles of “nursing” in different editions of the Encyclopaedia Britannica (10th, 11th, 14th, and 15th editions) published since 1859, when Nightingale published her Notes on Nursing and prevailed meaning and significance of nursing. As a result, we confirm from the descriptions of “nursing” from the different editions that the specialization of nursing has become more emphasized, and nursing has become practiced in much more international settings with supports from international nursing organizations. From this description, we realize not only the globalization of nursing, but also the internationalization of Encyclopaedia Britannica (from an Encyclopedia of the English speaking peoples to one for the entire human race).

Keywords: History of Ideas, Nursing, History of Nursing, History of Nursing Science, Encyclopaedia Britannica

江藤裕之 (えとう ひろゆき)
〒399-4117 駒ヶ根市赤穂1694 長野県看護大学
Tel. & Fax: 0265-81-5138
Hiroyuki ETO
Nagano College of Nursing
1694 Akaho, Komagane, 399-4117 Japan
e-mail: heto@nagano-nurs.ac.jp